

第二講 古代エジプト文化の揺籃期について（1）

マネト（前3世紀のエジプトの神官）の『エジプト史』

アレクサンドロス大王の時代（前332年）まで30の王朝

初期王朝時代（第1～2王朝）	前3100～2700
古王国時代（第3～6王朝）	前2700～2200
第一中間期（第7～10王朝）	前2200～2050
中王国時代（第11～12王朝）	前2050～1800
第二中間期（第13～17王朝）	前1800～1570
（ヒクソス時代	前1730～1570）
新王国時代（第18～20王朝）	前1570～1090
末期王朝時代（第21～30王朝）	前1090～332
（アッシリアの征服	前671）
（ペルシアの征服	前525）

ヘロドトスの『エジプトはナイルの賜物』という言葉について

「エジプト初代の人間王はミーンであったという。この王の時代には、テーバイ州を除いてはエジプト全土が一面の沼沢地で、現在モイリス湖の下流（北方）に当たる地域一体は、今日海からナイル川を遡航して七日間を要する距離にわたっているが、当時は全く水面下に沈んでいたという。」（第二巻第四節）

「エジプトの国土に関する彼らの話をもっともであると私にも思われた。というのは、いやしくも物の解る者ならば、例え予備知識を持たずとも一見すれば明らかなことであるが、今日ギリシア人が通行しているエジプトの地域は、いわば（ナイル）河の賜物ともいべきもので、エジプト人にとっては新しく獲得した土地なのである。」（第二巻第五節）

ナイル川：「ハピの神」と崇める

12の頭と3本の足を持つ巨人

全長 5760 キロ・世界第二の長い河

水源地：アルバート湖

本流：白ナイル（年中水量一定）

支流：青ナイル川とアトラバ川（5～6月頃のエチオピア高原に降るモンスーンによる増水によって洪水をもたらす）

洪水：デルタ付近では7月半ば頃から増水がはじまる

増水開始期の周期性：夜明けの東の空にシリウスが輝いている時

シリウスは全天に輝く星の中で最も明るい星

9月下旬～10月：水位最高。耕地は1～2メートルの洪水に冠水

11月中頃～：水が引き始める

6月：水位最低

「洪水が起こるのを見て彼らは（地の果ての神アケルと大気の神シュー）恐れおののく。（しかし）草木は笑い、岸边は緑に覆われる。神々の供物が天から（ナイル川へ）下る。人々の顔は輝き、神々の心は小躍りする。」
（ピラミッド・テキスト）

国土

「ナイル川の水が潤すところは全てエジプト。エレファンティネ（アスワン付近）から下流に住み、河水を飲む者はことごとくエジプト人である」（ヘロドトス）

国土面積：95万5千平方キロ

可耕地：3万5千平方キロ

アスワンからカイロまで約880キロ。

川の東側は絶壁が多く、アラビア砂漠が東から迫り、西側は緩やかな段丘があり、その西にリビア砂漠が広がる。

二つの土地（上エジプト・下エジプト）（タウイ）

黒い土（ケメト）

外国（周りの砂漠・ひなびた丘の国）（カセト）

赤い土（デシェレト）

人の住める地域は限られており、九州より狭い。

デルタ地帯（カイロ・メンフィスから北：12の支流を持つ）
南北 200 キロ・東西 220 キロ

太陽暦の採用（前 2770 年頃）

7 月半ばが元旦

1 年を 12 の月に分け、一月を 30 日とし、年の終わりに 5 日間の祭日を追加して 1 年 365 日とする。

閏年を置くことを知らなかった。4 年に 1 日ずつ狂い、1460 年毎に暦と季節が一致する。

季節は三つからなる：各季節 4 ヶ月

増水期（アケト）・播種期（ペレット）・収穫期（シェムウ）

氷河期時代以降の気候変動

降雨に恵まれ、いたるところに沼沢地が広がり、森林が繁茂し葦やパピルス草が背高く生い茂る。ライオンや象、野牛、カモシカ、シカ、山羊、羊などが生息。

乾燥化→ナイル川の流域に集まり住む

前 6,000 頃 農耕はじまる

洪水による、沃土の堆積。播種。生育。収穫。

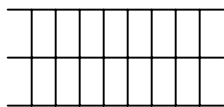
石製の鋤。棒切れ。

オオムギ・コムギ・マメ類・棗椰子・亜麻。

前 3,500 頃 小王国の形成と統合

独自の守護神を持つ

小王国の統合→州（セパト／ノモス）＝土地の分割＝運河や掘割



不死と再生への願望

砂漠の砂地や柔らかな岩盤を掘る

手足を折り曲げ、横向けにして埋葬

遺体は亜麻製の布に包まれ、食べ物を入れた容器や日常使用した品々を副葬

乾燥した砂による自然乾燥→死体のミイラ化

野生の犬などによって死体が掘り出され、食われるのを防ぐために墓を作る→地面から離されるために死体の腐敗が起きる→人工的なミイラ化（ナトロンによる脱水。腸や脳の抜き出し）

肉体に「カア」と呼ばれる魂が宿る。死後、一次肉体から離れ、鳥の中に移るが、何れ肉体に戻り死者は再生する。

男性の身長は 1.64 メートル、女性の身長は 1.52 メートル。

長頭型。暗褐色か黒色の頭髪、直毛もしくは軽い目のウェーブ。顔はほぼ楕円形。女性の鼻は平べったい。

ヘロドトスの伝えるミイラの作り方

- 1) 脳と腸を取り出す。七〇日間ナトロンの溶液につける。ミルラの香油を塗布。黄金のお守り等をつけて亜麻布で巻く。その間、神官による祈禱が続く。
- 2) 腸に香油を注入。内臓を溶かす。七〇日間ナトロンの水溶液につけ、脱水。
- 3) ナトロンの水溶液に三〇日間漬け込んで、脱水。

使者に供物を捧げ続けることが遺族の最大の宗教義務。

アラバスター製の容器に納められた食べ物を玄室や周辺の部屋に納め、閉ざされた墓の入り口に葬祭殿を構築して専門の神官を就け、犠牲を捧げ、食べ物を捧げる。

太陽の日没と日の出や植物の再生、繰り返される洪水→再生を信じる→「オシリス神話」（ローマ時代に完成）〔ヌト（天の女神）とゲブ（大地の神）、オシリス（穀物の神、冥界の王）とイシス（玉座の女神）、セト（暴力と砂漠の神）とネフティス（死の女神）、ホルス（天上の神、

地上の王者)]

第一～二王朝

メネス：「半神半人の支配者の後を継いだメネスは、62年間治めた後、河馬に連れ去られた」

メネスの存在は証明されず。

さそり、という文字で記される王が最も古い。

ナル（魚）・メル（蚤）：パレット（高さ約1メートル）

上部に雌牛の「ハトホル神」

裏面：上エジプトの「白冠」を被ったナルメル王が棍棒で敵を打ち砕く。

ホルス神がパピルスの生える大地を紐で縛り、敵兵が逃走を企てる。

表面：下エジプトの「赤冠」を被ったナルメルが軍団旗を四個掲げる部下に囲まれて凱旋。右端に腕を縛られ、首を切り落とされ、足元に頭が置かれた敵の死体。

中段に紐で縛られた二頭の首の長い動物が絡み合っている。

アハ・ゼル・ゼットなどと一緒になってメネスの伝説となる

ファラオ←ペル・アア（大きな家）。Cf：大御門＝天皇

セルク：鷹神ホルスの称号・上下エジプトの女神・上下エジプトの王（後に黄金のホルスの称号・太陽神の子の称号が追加される）

下段に牡牛が敵の城壁を打ちこぼし、敵を押さえつけている。

上エジプトのティス（ティニス：溪谷地帯の奥）出身

デルタの入り口にメンフィス（白い冠の城壁）を建設

白い冠＝上エジプトの王冠

後に重要な政府機能を移す

ティス近郊のアビドスや、メンフィス近郊のサッカラに日干しレンガ造りの墓を建設

マスタバ墓

ナイロメーター設置（各地）

毎年の水位を記録、徴税の目安とする

二年に一度、国勢調査

シナイの銅鉱山開発

ヌビアから金、象牙、黒檀などを輸入

シリアのゲバル（ビビュロス）にエンポリオン建設：杉材やオリエントの
産物を輸入

外海用の大型帆船建造

地方貴族の「州牧」化

貢納と軍役のみ負担

従来 of 伝統的権力と権威は保持